

忘れられない長崎修学旅行

ぼくは、修学旅行をとでも楽しみにしていた。

長崎に着いて、大浦天主堂やグラバー邸ていなどいろいろなところを見学した。

その中で、とても心に残ったことがあった。それは、原爆げんぱくが落とされたときの様子を学習したときのことだ。

ある被爆者ひばくしゃの方がこんな話をされた。

「その日、わたしは、自転車に乗っていました。すると、ピカッと光ってドンと音がしました。原爆が落ちたのです。そのしゅん間のことは何も覚えていません。気がついたら、うつぶせになり、うでから手首まで服がどろどろにとけ、皮がはげていました。背中の皮もはげていました。自転車もめちやくちやになっていま



した。あたりには、『水をくれ、水をくれ。』

と、水を求めてさまよう多くの人たちや、原爆でなくなられた人たちの死体がいっぱいでした。わたしは、病院に運ばれましたが、患者さんが多くて、学校に送られました。しかし、薬も何もありませんでした。何日かたって、やっと食べ物がもらえたとき、初めて、生きているんだと思いました。それから数日たつと、体の肉がくされ始めました。くさった肉を自分で取り除き、ぼろぎれに包んですてていました。この原爆で、たくさんの人が一しゅんのうちになくなりましたが、その中に、わたしの家族もいます。当時のことを思い出すたびに、なみだが止ま

らなくなり、自分も家族のところに行こうと何度も思いました。でも、わたしは、生きていてよかったと思っています。」

ぼくは、初めて聞く話に、ただ、おどろくばかりだった。

国際文化会館にも行った。体全体が焼け、真っ黒になって死んでいる人の写真や、肉が焼けただれている人の写真の前で、ぼくは、思わず立ちすくんでしまった。

友達の中には、

「戦争中に生まれんでよかったね。」

と、話をしている人もいたが、ぼくは、なぜか、そんな気にはなれなかった。

